



できごと

平成22年11月24日、掛川市立中央図書館において、「静岡県立中央図書館新刊児童図書巡回展示研修会」を開催しました。

新刊児童図書約1,200冊を会場に展示するとともに、県総合教育センターの学校図書館担当である夏目聡美指導主事から、「学校図書館充実のための選書」に関するお話を伺った後、静岡文化芸術大学の林左和子准教授に、「新刊児童書の選書について」と題して講義をしていただきました。県内の図書館や小・中学校で現在実際に選書に携わっている参加者の方々が、熱心に新刊を閲覧されていました。講義終了後には資料相談の時間を設け、資料を閲覧しながら、選書についての相談を受けました。

(2ページ目にて、概要を紹介します。)

子どもの本に関する賞

子どもを読者として想定している本にも様々なものがあり、日々多くの本が刊行されています。その中から子どもに与える本を選ぶ際に、選択の候補として、子どもの本に関する賞を受賞した作品も検討してみたいはいかがでしょうか。

今回は、この1年間に発表された子どもの本に関する賞の受賞作をまとめてみました。

賞の中には長く続いている伝統的なものもあります。未発表作品を対象としたものでは、まだ受賞作が刊行されていないものもあります。

また、海外の受賞作の場合には、翻訳されて日本で出版されるまでに時間がかかるものもありますが、今回はコールデコット、ケイト・グリーナウェイの両賞とも翻訳版が出ています。

(3ページ目にて、概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

◆「茶の本」

緑茶、紅茶等、お茶に関する本を展示します。

◆「ニッサン童話と絵本のグランプリ」と子どもの本に関する賞

この号で紹介している各賞の受賞作品のうち、子ども図書研究室の所蔵分を展示します。

◇イベント情報 その1◇

◆グランシップ 県立図書館コーナー

えほんのひろば「おはなしかい」のごあんない

グランシップ県立図書館コーナーえほんのひろばでは、下記の日程で定期的におはなしかいを開催しています。

毎週火曜日：午前10時30分から

「0歳からのおはなしかい」

第3日曜日：午前10時30分から

毎週木曜日：午前10時30分と午後3時から

*国民の休日、その他臨時でおはなしかいをお休みすることがあります。

◇イベント情報 その2◇

◆国際子ども図書館展示会

「日本の子どもの文学

ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩みー」 児童文学者コーナー 第1回 石井桃子

国際子ども図書館初となる長期の展示会です。明治から現代に至るまでの時代をいどった代表的な児童文学作家・画家の作品を紹介しています。児童文学者コーナーでは、著名な児童文学者の作品を半年ごとに入れ替えながら、全体で約270点が展示されます。第1回目は石井桃子の多彩な業績が紹介されています。

開催期間：2月19日(土)～8月21日(日)

時間：午前9時30分～午後5時

休館：月曜日 毎月第3水曜日(資料整理休館日)、
5月5日を除く国民の祝日・休日、年末年始

会場：国際子ども図書館3階 本のミュージアム
*入場無料

住所：〒110-0007

東京都台東区上野公園 12-49

TEL:03-3827-2053 (代表)

TEL:03-3827-2069 (録音による案内)

新刊児童図書 巡回展示研修会報告

新刊書の傾向について：当館職員から、今回用意した新刊を中心として、話題になった新刊などをご紹介します。

『ねえ、どれがいい？』（ジョン・バーニングム／さく まつかわまゆみ／訳 評論社）や「うさこちゃんシリーズ」（ディック・ブルーナ／ぶん・え いしいももこ／やく 福音館書店）などの改訳新版を紹介したほか、『したきりすずめ』や『かさじぞう』などの日本の昔話の絵本化、論語に関連する図書の出版ブーム、『すいぞく館本物の大きさ絵本』（小学館）と『ほんとのおおきさ水族館』（学研教育出版）の比較などを話題に取り上げました。



学校図書館充実のための選書について：夏目聡美指導主事から、次のようなお話がありました。

学校図書館には、読書センター的機能と、学習・情報センター的機能という2つの役割がある。言語環境を整える上で、学校図書館は大きな役割を持っている。伝統と文化の尊重が教育の目標に加わって、各教科の扱う内容が変化した。また、図表などを読み取り、評価して活用する力を伸ばすということに対応するために、蔵書構成を意識した選書が求められている。従来中心となっていた読み物に加え、0～8類の図書も広く収集し、調べ学習に対応できるようにしていく必要がある。また、社会科学や自然科学等の資料では、情報が古くなったら蔵書を更新するよう注意を払う必要がある。



新刊書の選書について：林左和子講師から、新刊書の選書について、講義をしていただきました。講師の言葉の中から、印象的だったものをご紹介します。

選書は、すべての子どもが、等しくその必要としている情報と出会うことができるようにす

ることを目的として行うことが大切である。その際、子ども自身がその必要性に気づいていないこともある点に注意が必要である。

読まれる本の傾向を予想して、蔵書構成に「偏りをもった図書館」を目指すべきである。この実現には、図書館間のネットワークによって蔵書の不十分な部分を互いに補い合うことが前提となる。図書館を利用する個々の子どもと向き合いながら予想を立て、その本の選定理由を説明できるかどうか考えながら選書するとよい。

選書に失敗はない。子どもに予備知識がなくて理解できなかったために反応が低かったとしても、それを紹介することに価値があるということもある。選書した後のアフターケアで、提供方法を考えながら今後活かしていくとよい。



資料相談：講義終了後は、林講師と夏目指導主事のほか、当館職員も一緒に、新刊を閲覧しながら資料相談を受けました。参加者からは、学校司書と公立図書館員との連携についてや、百科事典の使い方指導を公共図書館でどのようにできるか、中学校でライトノベルズを入れるべきかどうか、小学校の学校図書館に置くYAの本についてなど、様々な相談が寄せられました。

所蔵資料から

知識

『ほんとのおおきさ水族館』



小宮 輝之／監修

学研教育出版

2010年3月

イルカやラッコなど、水族館で見られる様々な生物について、大判のページを効果的に使い、うろこや皮膚の質感が伝わってくるような原寸大の写真により紹介する。大型の生物については、頭部を主としたそれぞれの特徴的な部分の写真を掲載する。写真の中で特に注目すべき点も記されており、個々の生物の様子が伝わってくる。 【小学校低学年から】 (剣持)

子どもの本に関する賞

赤い鳥の会が主催してきた赤い鳥文学賞、赤い鳥さし絵賞、新美南吉児童文学賞の3賞が、今回をもって幕を閉じました。

歴史ある児童文学の賞が無くなってしまふのは大変残念ですが、例えば赤い鳥文学賞の第1回受賞者である椋鳩十氏の名を冠する賞が創設されているように、その役割は次の世代に受け継がれていると言えるのかもしれませんが。

下の表に、最近1年間に子どもの本に関する賞を受賞した作品をまとめました。

賞名	受賞作品 (*印は当館所蔵)
赤い鳥文学賞・さし絵賞	『建具職人の千太郎』(岩崎京子/作 田代三善/絵 くもん出版) *
小川未明文学賞大賞	『レンタルロボット』(滝井幸代/著 未刊行)
けんぷち絵本の里大賞	『ちゅーちゅー』(宮西達也/作絵 鈴木出版) *
講談社出版文化賞絵本賞	『くさをはむ』(おくはらゆめ/作 講談社) *
五山賞絵画奨励賞	『やさしいまものバッパー』(野坂悦子/脚本 降矢なな/絵)の絵画
産経児童出版文化賞大賞	『風の靴』(朽木祥/著 講談社) *
小学館児童出版文化賞	『つづきの図書館』(柏葉幸子/著 講談社) * 『ぶた にく』(大西暢夫/写真・文 幻冬舎エデュケーション) *
坪田譲治文学賞	『おれのおばさん』(佐川光晴/著 集英社)
新美南吉児童文学賞	『優しい音』(三輪裕子/作 小峰書店) *
ニッサン 童話と絵本のグランプリ	『トンノのひみつのプレゼント』(田中きんぎょ/作 BL出版) *改題 『てんのおにまつり』(宮崎優、宮崎俊枝/作・絵 BL出版) *改題
日本絵本賞大賞	『カワセミ：青い鳥見つけた』(嶋田忠/文・写真 新日本出版社) *
日本児童文学者協会賞	『園芸少年』(魚住直子/著 講談社) * 『風の陰陽師1～4』(三田村信行/作 ポプラ社) *
日本児童文芸家協会賞	該当なし
野間児童文芸賞	『きのうの夜、おとうさんがおそく帰った、そのわけは……』 (市川宣子/作 ひさかたチャイルド) *
ひろすけ童話賞	『じぶんの木』(最上一平/作 松成真理子/絵 岩崎書店) *
福島正実記念SF童話賞	『エレベーターは秘密のとびら』(三野誠子/作 岩崎書店) *
椋鳩十児童文学賞	『ぼくとあいつのラストラン』(佐々木ひとみ/作 ポプラ社) *
コールデコット賞	『エイモスさんがかぜをひくと』(フィリップ・C.ステッド/文 エリン・E.ステッド/絵 青山南/訳 光村教育図書) *
ケイト・グリーンウェイ賞	『さよならをいえるまで』(マーガレット・ワイルド/ぶん フレヤ・ブラックウッド/え 石崎洋司/やく 岩崎書店) *

所蔵資料から

文学

『建具職人の千太郎』



岩崎 京子/作

田代 三善/絵

くもん出版

2009年6月

今回の赤い鳥文学賞、赤い鳥さし絵賞受賞作。江戸時代後期、生麦村の貧しい農家に生まれた千太郎は、7歳で隣村の建具屋に奉公に出た。既にそこで奉公していた姉に見守られ、職人たちに教えられながら、少しずつ職人らしくなっていく様子を温かな筆致で描いた作品。(児玉)

新着資料から

文学

『風をつかまえた少年』



ウィリアム・カムクワンバ／著
田口 俊樹／訳
文芸春秋
2010年11月

世界最貧国とされるマラウイ共和国（アフリカ）のウィリアムは、飢饉のために学費が払えず、中学校を退学したが、NPOの図書室で理科の教科書に出会う。彼は、自宅に明かりをつけること、水をくみ上げて年に2回トウモロコシを収穫することを目指して、物理やエネルギーについての本を読み進み、ついに廃品などを利用した手製の風力発電装置を作り上げる。

貧しさ、飢餓、製作の苦勞だけでなく、子どもたちに通底する知的好奇心、生きる喜びを生き生きと語る実話。【中学生から】（鈴木）

知識

『くらしを変えてきたあかりの大研究』



坪内 富士夫・藤原 工／監修
深光 富士男／著
PHP研究所
2010年11月

たき火からLEDまで、あかりが発展してきた様子を解説する。油やろうそくを使ったあかりの紹介には特に多くのページを割き、「ひょうそく」や「がんどう」等、なじみの薄い照明器具を写真によって分かりやすく紹介する。明るさと扱いやすさを求めて様々な工夫がなされてきた様子がうかがえ、興味深い。

炎による暖色系の弱い光の下での生活はどのようなものであったのか、想像力を刺激される。巻末にはあかりの常設展示をしている施設の案内も掲載。【小学校中学年から】（剣持）

文学

『さらば、シッコザウルス』



服部 千春／作
村上 康成／絵
岩崎書店
2010年11月

主人公のタクヤは小学校1年生。おねしょが治らないのが悩みの種だが、それはタクヤのせいではない。夢の中でトイレに行きたくなると決まって現れ、タクヤを素晴らしいトイレに案内しオシッコをさせる、自称トイレあんない人の怪獣「シッコザウルス」のせいなのだ。

ロケットや新幹線、スーパーカーなど、シッコザウルスに案内された素晴らしいトイレで、つい気持ちよくオシッコをしてしまうタクヤの夢の話が、文と絵でユーモアたっぷりに描かれている。【小学校低学年から】（児玉）

絵本

『おばあちゃんとおじいちゃんの家に行くときは』



アン・ボーウェン／作
トメク・ボガツキ／絵
ひろはた えりこ／訳
小峰書店
2010年10月

両親と街に暮らす子どもにとって、田舎の祖父母の家に遊びに行くことは、大きな楽しみのひとつである。そのわくわくした気持ちを、主人公の女の子は弟に語りかけることで、さらに大きくしていく。彼女の語りには、四季折々のその時ならではの楽しみがいっぱい詰まっていた、それを弟といっしょに味わえたらいいなという期待も混じっている。舞台はアメリカであるが、子どもにとっての祖父母の存在の大きさを、誰にもストレートに感じさせる作品である。

【小学校低学年から】（小松）